

△山々鉄志 「身止の年明に就く」

(要旨) 私に協同盟に在つた時、國際労働會議の利用程に就て討論したのは既に五六年前の事であつた。昨年一月三回に列島の原田は法一、國際労働會議に認められた初機となつたのはなほ、協同盟の幹部が我々を自として共産主義的行動を採るものなりとし、除名せられたのである。故此の實

加藤氏の年明を要する。レ、レ、レ、

△加藤氏十一

(要旨) 「協同盟を引退の初機は、只今山々氏の言はれと通

リと思ふ。

△日本労働者新支持にあつたは、望月淳次

(要旨) 「我々は協同盟の成立を自として、互利主義

的方向を好む。在労働者統一戦線に移す前線ありと

思惟するものである。現在日本の労働者が如何に戦線の統一

を切望してゐる実情を考へなければならぬ。注五章 戦線他の

事案に就て各地に異なる方向を出し、拒抗するものは、方

別に主義の實証である。我々は國際労働會議と論ずる

のではない。國內の問題より論ずべきであると思ふ。我々は日

本の労働的條件、統一と分裂を、戦線を統一する時どう

しても、戦線統一の必要を痛感するもので、部分的統一か

ら漸次的統一へと進んで行くべきである。云々

日本労働者連合の全國的労働會議に對する戦線の備忘

を觀よ。その全國的統一戦線の威力は、若し日本の

津々浦々の労働者もストが行使した時には、官憲の力

を以てして抑へ難い。軍部の出動に依らざるは到底制